



赤羽別院報 第50号
 発行所 眞宗大谷派 赤羽別院 親宣寺
 〒444-0427 愛知県西尾市一色町赤羽上郷中14
 Tel・FAX (0563)72-2308
 Eメール akabane_betuin@katch.ne.jp

■講師プロフィール
 大賀 光範 (おおが みつのり)
 1956(昭和31)年 熊本県生まれ
 大谷大学大学院修士課程修了
 岡崎教区駐在教導
 元 同朋会館教導
 本願教化教導
 三重教区 淨園寺住職

人間って何だろう



化石も一緒に見つかりました。その人骨は、旧人類のネアンデルタール人のもので、十万年程前のものでした。研究者たちはこの場所をお墓と結論づけ、更に、この時点で社会が形づくられ、それだけでなく、ここから私たちは人間になったといっております。なぜ、お墓が見つかったかと、人間になったと結論づけることができるのか。それは「死」がわかったから、人間といっているのです。

死を受け止める
 昨年7月、神奈川県津久井やまゆり園で起ったニュースを聞いて、悲しい気持ちでいっぱいです。凶行に及んだ植松聖なる人物が、施設の入居者に向けて「人間でなく動物として生きていく」という決めつけの言葉に、人間とは何かを考えさせられました。そこで、葬儀とお墓から考えてみましょう。京都の東本願寺は眞宗本願といひ、親鸞聖人のお墓です。今も本願にはたくさんの人々が集い、聖人を偲んでいます。また、お釈迦さまのお墓の仏舎利塔の前にも、多くの人々が集い、教えを聴く場となりました。

宗教心
 では、「死」がわかるとはどういうことでしょうか。「死」は動いていないものが、動かなくなるといふことであり、もう二度と、一緒に笑うことも、語り合うこともできなくなりました。喜びも悲しみも一緒に味わうことができなくなるといふこと、別れのつらさを受け止めることが、「死」に出会うことです。この出遇いは、今亡くなられた方と同じように、隣で涙している人も死んでいく人。また、私自身も死にゆく「生」を生きている身であるという厳粛な事実を教えています。そこから、私の生命が終るま

食べ物をかち合う者
 人間とは何かを考えると、一つ興味深いことがあります。私たちの細胞の中にあるミトコンドリアには独自のDNAがあり、それは女性から女性へと引継がれていきます。その起源を調べたら、全ての人類が、アフリカの一人の女性に行きつくそうです。アフリカのジャングルに住んでいた私たちの祖先は、気候変動によるジャングルの減少により、草原へと追い出され、食料が乏しく危険の多い草原での生活を余儀なくされ、多くの群れが絶滅しました。ところが、私たちの先祖の群れだけが生き残り、子孫を残して繁栄することができました。何故なのでしょう。誰かが自分のことだけを考慮して生きていけばいい、いわば「自己責任」の場所です。でも草原はそういう訳にはいきません。子連れの母親に自己責任とてしまえば、子孫を残すことができず共倒れです。

常不軽菩薩
 『法華経』に、常不軽菩薩という方が紹介されています。菩薩です。それは、名のごとく「常に軽んぜず」という修行です。道で出会う人、どんな人に対しても合掌して、「あなたには必ず仏さまになれる方です。私はあなたのことを尊敬いたします。」と、いつまでも念を頭わすれず。人は必ず成仏する。成仏こそ人間成就であり、生きるとは、人間となる歩みを経ていく事だといふ事です。『法華経』では見ている訳です。誰かと顔を合わせます。自分

優性思想
 津久井やまゆり園の事件で、植松聖は「日本経済の活性化のために、生産活動ができない者を抹殺する」と宣言しています。人や物を、自分にとって役に立つかどうかという基準で見ると、優性思想といえます。ヒトラーは障害を持つ人を虐殺しましたし、日本でもハンセン病の罹患者を社会の役に立たないと、強制収容し、断種までしてしまいました。植松聖は、そのことを「全人類が心の隅に隠した想い」と表現していますが、皆さん

自己責任として弱者を排除するのではなく、食べものを分かち合い守り合っていく、やっとな生き残り、子孫を残すことができたのです。私たちは生存競争に負け、つらい環境を生きている中で、食べものを分かち合い、人間の歩み出しをすることができたのです。今日の社会では、敗者を自己責任として切り捨て、どうすれば勝者になれるかという話ばかりしています。これは人間になるという方向を向いているのでしょうか。

かといって答が見つかるという保証もない。だからといってやめる訳にもいかない。これこそ人間の究極の問題ではないでしょうか。「常不軽」が課題になっているからこそ、これが問となっている生きるといふことが宗教心を生かすということ。お釈迦さまは、人間が救われる法を「慚愧」と教えられ、慚愧ないものを畜生と言われている。慚愧とは「恥じる」ということです。

日ごろのこころ
 私たちは、今回のような事件を起こすことはないでしょうが、自分にとって役に立つかどうかを基準にしてものを考え、判断していることはないでしょうか。そして、全ての事柄を、善・悪・好き・嫌い。快・不快など分け、都合のいいものを集め、悪いものを排除し、自分をいつも善の立場に立たせよう。一生懸命に努力しています。悪は敗者であり、善こそが勝利者だからです。人生から、死という都合の悪いものを無くし、周りを自分の幸せのための道具にするために努力している。これが私たちの日ごろの姿ではないでしょうか。

お釈迦さまは、人間が救われる法を「慚愧」と教えられ、慚愧ないものを畜生と言われている。慚愧とは「恥じる」ということです。日ごろのこころを恥じ、そしてそれを無くすことができない自分と触れ続けることで、深い悲しみをもちて生きる。そういう生き方を人間といふのではないのでしょうか。親鸞聖人は「日ごろのこころには、往生かなうべからず」とおっしゃっていたそうです。本願を憑(たの)む生き様。念仏しながら生きることは、「そのように深く我が身を傷み悲しみ続ける生き方」と教えられているように載っています。

いかがですか? 「いや、私にはそんな考えは一切ありません」と胸を張ることができるでしょうか。

<p>帰敬式 4月11日(火) 午前11時 本山鎌後によりお剃刀を受けます。</p> <p>報徳会 4月11日(火) 午後1時 法話 第31組 蓮福寺 醫 敏郎師</p> <p>殉教記念法要 6月5日(月) 午後1時 本山鎌後御修修 法話 未定 ※午前11時30分 殉教記念碑前法要・美町 第12組・徳行寺蓮苑 詳細については別掲</p> <p>夏の御文げのおふみ 7月15日(土) 午後1時30分 法話 岡崎教区駐在教導 杉山 寧師</p> <p>赤羽ブロック世話方総会 7月15日(土) 午後3時</p> <p>晨朝法話 4月13日(木) 第12組 了願寺 藤谷信重師 4月28日(金) 同 蓮光寺 藤澤康秀師 5月13日(土) 第13組 慶徳寺 法輪無師 5月28日(日) 同 長壽寺 和田純悟師 6月13日(火) 第14組 本傳寺 本多圓昭師 6月28日(水) 同 安聖寺 安藤智彦師</p>	<p>赤羽御坊・蓮見俳句会 第4回赤羽御坊俳句会を開催します 日時 平成29年6月23日(金) 午前10時受付・正午締切 場所 西尾市菱池町蜂ノ尻6 徳行寺・福地駅徒歩10分</p> <p>出句 二句 白桃・齋藤朗笛先生</p> <p>講評 三〇〇円</p> <p>会費 昼食は各自でご用意下さい</p> <p>その他 優秀作品に記念品を贈り 赤羽御坊第51号に掲載 参加賞 手作り念珠用の蓮の実</p>
--	--

教化センターの三ヶ年を回顧

教化センター主幹 間島 享

3年前、因らずも地域教化センター主幹の大任を仰せつかったが、当初はその立場が解らず戸惑うばかりでしたが、三浦輪番をはじめ皆様方のご指導とご協力のおかげで、何とか務めさせていただくことができました。

振り返ってみますと、私自身は主幹でありながら軸足は広報部において「赤羽御坊」

が孤軍奮闘する部の姿を見ると、責任の一端を感じます。課題は種々ありますが、まずは4部門の連携を密にすることが肝要ですが、今後においては、部門編成の見直しをはじめ非宗教のスタッフ登用の推進等が必要かと思料する次第であります。

何にしても、別院と教化センターは「車の両輪・不離不分」です。設立10周年を迎え、些か気になる中たるみ感を一掃して、更なる発展が望まれるところです。

お正月三話



家族揃って初鐘

穏やかな年越の夜を迎え別院へ初詣に訪れた人々は思い思いに鐘の音を響かせ新年の幕明けを祝った。

堂内では甘酒がふるまわれ、おさがりを手にした笑顔があふれていた。

初鐘

修正会

初詣・初鐘が一段落した午前零時30分より、修正会が厳修され、勤行につづく御文さんは一帖目第一通に「御文」とは「弥陀成仏のこのかたはがとお勧めされた。最後に輪番の挨拶があり、別院の新年がスタートした。

双全講

1月15日、赤羽別院の護持と真宗の法義相統を願って、百三十年の歴史ある法要・双全講がお勧めされた。第8組専念寺坊守・羽向廣久子師の法話では、親鸞



聖人の妻・恵信尼の越後の役割や、娘の覚信尼について、聖人の廟堂を守る中の苦勞について話された。これらは、浄土真宗における女性の地位や役割の重大さを話されたものであり、女性の視点からの法話であり、とても勉強になった。

讓西賢師の講話 赤羽ブロック坊守学習会

赤羽教区区坊守さんを対象とした「坊守学習会」が、2月7日に別院で開催された。「坊守の存在環境―自己受容の安らぎ―」をテーマに、大垣教区・慶園寺住職の讓西賢師のお話を聞いた。



現在も岐阜聖徳学園大学で教鞭をとっていらっしゃる、若々しい話しっぷりと時々笑いを誘う話術に引き込まれ、講題は難しいが、内容はストレス不可避の現代社会の生き方というところで、私達にとって身近な問題であった。安倍総理の景気優先の政策・アベノミクスの影響か、現代

「御文」に学ぶ 廣瀬惺師の真宗講座

昨年度の真宗講座で「御文」をテーマに熱く語られた、同朋大学特任教授・廣瀬惺師を招いて開催された本年度の同講座には、大勢の方々が赤羽別院を訪れ参拝聴講した。

前年度に続き「御文」に学ぶ」をテーマに第一回の1月31日には、再度「末代無智」をとりあげて「法蔵菩薩の本願」について詳しく話された。

本願といえは「弥陀の本願」を説かれるが「仏説無量寿経」や「正信偈」にあるとおり、私達により近い「法蔵菩薩」の本願として捉えることが忘れられてきたのではないかと。



満堂の講座

熊本地震 被災地を訪ねる

昨年4月に最大震度7を二度にわたって観測した「熊本地震」は、今も人々の心と生活に深い傷跡を残している。

本年1月30日・31日、地震発生から9ヶ月が経過した被災地の現状視察のため教区内有志7名が熊本を訪れた。

初日は熊本ボランティアセンター本部の熊本事務所を訪れ、駐在教員の永井氏より、教区内の現状と課題を伺った後、熊本教区宇城地域の浄尊寺・教永寺・光照寺を訪ね、各寺院の方々から被災当初から現在までの被害状況、地域の様子、復興に向けての活動等をお話していただいた。

二日目は、益城郡益城町や、地震による大規模な土砂崩れによって崩落した阿蘇大橋の確立・本堂再建の促進」が提起され、院議会を包摂した拡大検討委員会において審議の結果、同4年に本堂再建実行委員会(委員長・第13組明榮寺住職・小谷香示師)が組織され、大きく前進するようになった。

このような過程を経て、平成5年5月に起工法要をお勤めして着手された本堂再建工事では、

- ◆ 25坪の新設
- ◆ 厨房並びに配膳室・11坪の新設
- ◆ 書院(座敷)の改装
- ◆ 仮本堂を庫裡兼事務所に変更するための増設及び改装

等々が施工された。

このようにして、門信徒をはじめ大勢の方々のご懇念の結果が本堂の再建となり、平成7(一九九五)年10月、御本尊・阿彌陀如来像が遷仏され、宗祖親鸞聖人・蓮如上人等の御影が所定の位置に安置された。7・8日の両日、待望の落慶法要並びに親鸞聖人七百回御遺忌法要が厳



崩落した阿蘇大橋跡

赤羽別院の歴史 その9

昭和34(一九五九)年9月28日、伊勢湾を北上し、尾張や西三河に甚大な被害を与えた超大型の伊勢湾台風は、無情にも赤羽別院の本堂をもなぎ倒し通り過ぎた。

翌朝から総代をはじめ関係者で対策を協議し、30日の朝から門前衆中心の人たちで、御本尊救出作業を行った後、本堂の片付けと並行して、急いで集会所を確保することを決め、掛け付けた大工さんの手により、2週間後には古本材を利用した10坪程の仮集会所兼事務所が完成した。

片付け作業には、地域の人々や近隣の村人により、連日30人体制で取り組み、一段落するの3週間程要した。

この間、門前の婦人衆も交代で、毎日数名がお茶の給仕や雑役に専任していた。

当時の日本経済は、戦後の混乱期から脱却し、神武景気に次いで大型経済発展を遂げた岩戸景気の入り口にあって、にも均らず、この地は相次ぐ地震と台風の自然災害続きで世間から取り残され、復興の兆しが見えず、人々は、精神的にも経済的にも疲弊しきつ

ていた。

この状況のなかでは、関係者や崇敬寺院では「本堂再建」は禁句であるかの如く皆が口を閉ざすこととなり、やむなく当面の処置として、三河地震の折、全損を免れた44坪の聖院を移設して仮本堂として使った。

こうして、仮本堂と仮集会所兼事務所が再建されたが、昭和47年には、聖院と同様に全損を免れた詰所を現在の庫裡の位置に移して仮本堂とし、聖院を改造した仮本堂は庫裡とした。

この間、日本の産業・経済は脅威的な成長を遂げ、この地の人々も相次ぐ天災被害から立ち直り、人心も安定し、信仰の拠り所・本堂再建待望論が囁かれるようになった。

本堂「お御堂」建立

昭和63年に、検討委員会が組織され、「西三河南部崇敬区」の寺院と門信徒の協力のもとに、別院の活性化と機能回復を目的し、信仰の場の確立を図ること」が決議された。

平成元年には、副輪番より篤聖人七百回御遺忌法要が厳



晴れて落慶をみた本堂については、輪番並びに実行委員会において慎重に議論された結果、「お御堂」と呼称することに決定されました。赤羽別院の歴史研究の一助になれば幸いです。ご愛読ありがとうございます。(完) 三矢・石川

組 10 集い
同朋の集い

能 邨 勇 樹 師 の 講 話
ひ ら か れ た 聞 法

厳しい寒さも過ぎ、梅のつぼみがほころび始めた2月16日、第10組では恒例の真宗講座「同朋の集い」が今川町の蔵西寺で開催された。

本年は、「ひらかれた聞法」をテーマに、同朋大学名誉教授の池田勇樹師をお招きする予定であったが、ご本人の都合により、急遽講師変更となり、師のご子息である石川泉小松市勝光寺住職の能邨勇樹師が同テーマのもと講演された。

師は、仏教で私たちの心・身を養う四種類の食べ物(心・身・心・身)である、穀食・触食・思食・識食の四食を紹介された。

中でも識食という仏法を食す生活によって開かれる心、ご自身が宗教科で携わった小松大谷高校野球部主将の卒業式での言葉を通して説かれた。生徒は逆転負けで甲子園を逃し「人生の苦しさを知りました」との言葉に続き「高校3年間は宝物でした」と述べた。

自分の努力が報われたわけではないが、一番辛い時の先生や友人・父母の支え、その全てに対し感謝の念に立つ時、苦しさがそのまま宝物だったという心が開かれると説かれた。

また、島田洋七氏の祖母、がばいばあちゃんのもの、お金がない中に本当の幸せや明るさを、お念仏の生活を中心にする中で開いていかれた心を紹介された。不平不満に心を縛られる私の方を、お念仏を「いただく」なかで開かれる講座となった。



法 話 聴 聞 と 茶 話 会
第 13 組 明 榮 寺 の 修 正 会

穏やかな陽気に恵まれた元日の朝、第13組明榮寺では修正会が営まれ、大勢のご門徒が参拝に訪れた。

正信偈のお勤めと御文拝読に続いて、小谷住職の法話では「めでたい正月に最期の時を迎えたり、棺の中で元旦を迎えたりと、生きるということは誠に不如意なものであります。祝婚歌で有名な詩人・吉野弘氏は『すべての河にめざす海がある』ならば、『すべての人には終りがある』という人間はどこまでいえるのか?即座にお浄土といえるだろうか。そこが肝心である。」と話された。

この後、参拝者の殆どが席を車裡に移して、恒例となっている茶話会では、住職をはじめ寺方一同とご門徒が車座となって、振る舞われる茶



住職を囲んで茶話会

平 田 聖 子 師 を 招 き
第 13 組 「 女 性 聞 法 会 」 を 開 催

例年にも増して厳しい寒波襲来のなか、第13組主催の「女性聞法会」が去る1月22日、味浜・養林寺を会場に開催された。

この会は、女性の登用や教化事業等への積極的参画を呼びかける宗門の願いにこたえる形で開催され、3回目を迎える法座である。

本年の講師には、岡崎市在住で作曲家の平田聖子師をお招きし、「親鸞聖人のみ教えを音楽で」と題し、お話を戴いた。

師は、平成7年頃から宗教音楽に携わり、主に宗祖の和讃にピアノの旋律を加えた曲作りをされている。

浄土真宗篤信門徒の家に生まれ、育てられたこともあり、幼少の頃からお寺に慣れ親しんだとのこと。曲作りのきっかけは、母親の「親鸞聖人の御和讃に節をつけて欲しい。」の一言であったことを話された。

この日は「正像末和讃」弥陀の本願信すべし本願信するひとはみな撰取捨の利益にて無上尊をばさざるなりを含め全5首を披露された。

お話の合間にキーボードを演奏し、和讃の意味や本願のいわれについても丁寧に説明されるなど、堂内は和やかな雰囲気包まれた。

音楽を通して、真宗の教えをわかり易く伝えようとする真摯なお姿が印象的であった。



賑やかに親子バザー
多彩な報恩講

「ひととは言葉によって、意識の明晰さに訴えかける。何が届くのかお寺を訪ねてみませんか。」と銘打った、第11組・本澄寺の報恩講は、2月3日から3日間に亘り開催された。

中日の4日午前「親子DE緑日・親子バザー」には地域の子ども達が勢つめかけ、正信偈をお勤めした後、自らが売り手になったり、

「ひととは言葉によって、意識の明晰さに訴えかける。何が届くのかお寺を訪ねてみませんか。」と銘打った、第11組・本澄寺の報恩講は、2月3日から3日間に亘り開催された。

中日の4日午前「親子DE緑日・親子バザー」には地域の子ども達が勢つめかけ、正信偈をお勤めした後、自らが売り手になったり、

お客になって玩具や菓子の品定めをしたり、うで輪念珠の手造り・輪なげ・独楽回し等をして、楽しいひと時を過ごした。

法座では、柳野住職以下三河寺では、給解座スタッフ6名が講師をお勤め、高座から語りかける節説法・浄土宗ながら親鸞聖人に心酔する女性の名調子・在家出身の現役大生僧侶の初々しい説教等に続く、千秋楽を勤める琵琶法師・住職定番の絵解き説法は、聞き応え充分であった。

また、二日日夜、堂内の照明を消し二本のロウソクの灯に浮かびあがった、住職により拝読された「御伝鈔」は、幽玄にして迫力満点のものであった。



第 11 組 本 澄 寺

安 樂 寺 ・ 二 話

三河地震・法要と写真展

72年前の昭和20年にこの地方を襲った、局地的大地震・三河地震は、家屋等の倒壊のみならず、二千人余の生命を奪った。

折からの第二次世界大戦の戦火を避けて、名古屋から集団疎開していた学童8人が本堂倒壊の犠牲になった第8組安樂寺(住職・伊奈祐師)では、忌日となる1月13日、失われた尊い命を偲び、懇に弔う法要を営むとともに防災意識の高揚を願って「三河地震写真展・DVD上映」を開催した。

満堂の参拝者は、お勤めの後、堂内に展示された60点余の当時の写真・図画・新聞等や、放映されたキャッチ

このDVD鑑賞から得た教訓は、突発的に発生する地震から身を守るには、家屋の耐震補強は当然として、「室内家具の転倒予防対策」を行うことが極めて重要であると報じている。



チヨット 西尾藩士と安樂寺

徳川幕府の文官重臣で、関東郡代を一九〇年もの長期にわたって世襲した西尾市小島町出身の伊奈氏に縁りの安樂寺に係る、ナイスなニュースをお届けします。

江戸時代中期の明和元(一七六四)年、山形から西尾藩主に転封となった、譜代大名・大給松平氏は、代々幕府の老中等の要職を務めており、江戸に屋敷を構えて常に西尾城と江戸屋敷を往來する必要があった。

この物語は、ここで安樂寺が登場するのである。

即ち、江戸との往復の際、往路では、西尾城を羽織・袴の正装で出発し、安樂寺の車裡で正装を解き、ここから江戸までは軽装で旅をしたとの事である。

帰路は、この逆で安樂寺で正装に着替をし、更に、

若松町の稻荷堂で顔や手を清めてから帰城した。

また、普段、岡崎方面との往來では安樂寺門前で下馬、一礼が慣であった。

また、西尾藩には越前に飛び領地約3万石があり、朝日町(現、福井県越前町)に陣屋がおかれていたが、この往來の際にも、遠廻りとなるが、安樂寺を経由することが定番となっていた。

もう一つ、安樂寺と西尾藩藩士とのチヨットい話を紹介します。

前任地山形で現地採用された藩士の内、何人かが西尾に同行赴任しましたが、遠隔地であるため帰省が叶わず折々に故里替りに安樂寺を訪れ、時には住職と碁盤を囲むなど家族付き合いに発展することもあったといわれている。

思いやりとまごころの
お仏壇の **たなか**
TEL 0533-67-9700
株式会社 蒲郡田中仏具
蒲郡市拾石町塩浜63番地

JAの建物の保障「建物更生共済」は保障範囲の広さが自慢です!

台風・暴風雨・豪雨 落雷 火災
地震による倒壊 地震による火災 津波による水災
詳しくは JA 西三河 お近くの支店までお問合せ下さい

仏壇・神具・墓石・製造販売修理
創業 明治20年
佛 光
碧南市源氏町 一丁目45-1番地
休日/火曜日
☎0566-41-2044

人間模様 その18

赤羽別院をはじめ、三河別院や多くのお寺に足を運び、熱心に仏法聴聞に励まれている第14組専修寺門徒 碧南市久留町在住 市古房喜氏を訪ね、毎年組内の報恩講を楽しみにして、報恩講予定表を片手に、時間のゆるす限りお参りを続ける、氏のお心をお聞かせいただいた。

「ご聴聞のきっかけは？」
今年七回忌を迎える父が介護施設に入所していたとき、介護士さんにお父さんは毎日熱心に『漢文』を読んでおられます。ご立派な方ですね」と言われびっくりし、父に何を読んでいるのか聞いたところ、『正信偈』に決まるとのことが言われた。

その時、家では父が毎朝仏壇の前で『正信偈』を声を出して称えていたことに気づき、自分が情ななくなり、父が亡くなり、お寺との関りが熱く戻ってきたんです。その中で、真宗の学びの場として、組に『心の元氣塾』があることを知り、参加するようになったんです。



笑顔で語る市古さん

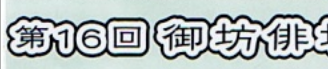
「『歡喜抄』は、私のそれまでの思いを見事に裏切ってくれました。人間に煩惱がある限り、純粋な善行や寛りが出てこない」というのは



開基以来約千二百年の歴史を誇る第8組・浄顯寺は、小高い山裾に静かな佇まいの名刹で、宗祖親鸞聖人と中興の祖・蓮如上人と深い縁りを持つ寺である。開基当初は、天台宗寺院・最澄寺と称したが、約三百年を経た嘉徳元(一一二五)年を境に浄顯寺と改称された。

年、宗祖親鸞聖人が三河の地教化の折、浄土真宗に転じ、寺号・浄顯寺と聖人白壽像面を賜った。更に時を経た今を遡ると五〇余年の室町時代、蓮如上人による三河教化の際には、赤羽別院親宣寺の際にもいえる、上人の念仏道場が開かれた直後の文明道場(一四八九)年、浄顯寺に入興され暫く逗留のうえ教化に励まれた。この際には、名号軸や御真影等々の他に、本堂前に紅梅一本を植下された。この紅梅は経年により枯死したが、現在では、樹齢二百年余と伝承される後継木が、蓮如上人を偲ぶが如く見事な花を咲かせている。

「お念仏の心が聞かなくなった」と言われているが、確かにお寺でも本山でもあまり聞かなくなっている。お念仏では東西較差があり、私の



第14組・安専寺門徒 釋 宝樹(辻 正三)

門徒の声

東西較差 毎年いたなく法語カレンダーで、真宗には十派あることがわかる。本年1月、二回に分けてその全ての本山にお参りさせていただいた。丁度、三重県の高田派と西本願寺では、偶々お勧めされていた報恩講にお参りさせていただいた。高田派は、宗門高校の生徒と一緒にになり、青年の若く揃った声の誦経と念仏に感動！

「空念仏も、殻がとれば実が出る」と言った人がいるが、私はこの度、この記事を書いたことを契機に、「実のある念仏を称えること」を心掛ける日暮らしをするようにしよう。負けないように！

「よみがえる赤羽別院親宣寺の歴史」発行

赤羽別院親宣寺は、かつての蓮如上人開基の念仏道場の跡地と、その隣接地に額田郡上六名村(現・岡崎市)出身の江戸の旗本・本目勝左衛門親宣により、元禄14(一七〇八)年に創建、寛政10(一七九八)年東本願寺の願所(後に別院と改称)となり、『赤羽別院本目親宣寺』として今日に至っているところである。

創建から三百年余の今日に至る歴史は、史料が滅失・散逸して乏しいうえに、伝承する人も少なくありません。衆ある赤羽別院の歴史断絶を憂慮する石川鴻英氏が、青年期から別院と関わり、今も熱心に世話方を勤める三矢平市氏所蔵の写真・絵図や貴重な伝承をはじめ、各種資料を収集して子々孫々に伝承することを思い立ち、両氏を支持し、大勢の協力を得て、『赤羽地域教化センター』設立10周年記念誌』として本年4月中に発行の予定です。

「お念仏の抽出」に！

ある旧家の庭に椿の古木が二本。毎年、赤・白・斑入りの美しい花を咲かせます。その一本に真っ赤、もう一本には純白の二ツ目の花を見つけた。家人は「毎年二本の木で三・四輪の二芯の花を見かけますが、この二輪は格別に見事に」と話された。



ある旧家の庭に椿の古木が二本。毎年、赤・白・斑入りの美しい花を咲かせます。その一本に真っ赤、もう一本には純白の二ツ目の花を見つけた。家人は「毎年二本の木で三・四輪の二芯の花を見かけますが、この二輪は格別に見事に」と話された。

第16回御坊俳壇・川柳

俳句(順不同) 選者 三浦 貞業氏他
閑俳桶に 日差柔らか 草萌ゆる
春泥を 来て父母の墓 訪ねけり
春立ちて 空真青なる 日和かな
坊守の いつも小走り 報恩講
菜花風 秋辺堂への道 風明り
春北風 どんと立ちある 大銀本
着膨れて 杖を頼りの 寺参り
開法日の 同朋集ふ 初風経
日だまりの 落葉踏み分け 寺参り
うたた寝は 春の初めの 窓辺かな
川柳(順不同)
年金が 当てにされてる お年玉
古希はまだ 若輩ものと 蚊帳の外
チヨコの数 数えて悩む 六年生
お知らせ 次回は第4回赤羽別院連見俳句会です。詳細は一頁をご覧ください。

「一昨年、地方寺院の窮状をレポートした『寺院消滅』失われる地方と宗教」に続いて、昨年十月に『無葬社会』彷徨う遺体と葬送の変化(日経BPS社)という本が、記者であり僧侶でもある鶴岡秀徳氏により刊行された。師は、自稱「寺の収入だけでは食えられない僧侶」であるが故に、記者という職業をもち、双方の視点で寺院宗教周辺の環境・事象を描くことができる貴重なジャーナリストである。テーマは「多死(大量死)時代の到来と葬送の変化」とし、火葬待ちとそれに伴う「遺体ホテル」の出現・核家族化の結末「孤独死」・居場所がない遺失族扱いの遺骨・巨大納骨堂の造営等その内容は、正面から向き合うことが懼られるようなことばかりである。今回は、都市部中心の内容ではあるが、どれひとつとって反対岸の火事として、安穩と捉えるわけにはいかないのでは？ いずれ地方にも波及、いや、すぐ目の前に起きてくる事象ともいえるのではないだろうか。寺院・僧侶・門信徒が、それぞれそのあり方を問い直すことにとまらず、出家の仏教ではない「本来の日本の在家仏教」のあり方、更には、日本人のこのころのあり方を、それぞれの立場を超えて、確かめるべきときがきているのではないだろうか。ややもすると、日頃煩わしく感じている、自身の足元の地縁・血縁の大切さを見つめなおすことから始めてみては？

お寺の掲示板

義理と
人情と
佛心と

第九組・源徳寺

赤羽御坊新聞懇話会

第14組 西光寺同行会様

貴重な懇話志を
ありがとうございました。